

二〇一七年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一七年 二月一日実施

国語

一次

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

私は以前、高齢者、お年寄りがなぜキレやすいのかということ、対話する力という視点から考えたことがあります。多くの人は現役時代に、多様な人との関わり方、対話を行っていたはずですが。人の腹を読む、腹を探る、気持ちを察する、顔色を読む、あるいは引く、押すといった駆け引きなど、さまざまなレベルで対話する場面があった。

しかしリタイアして、そうした対話を失うと、当然、能力は落ちるとキレル。キレルというのは対話拒否です。① 対話する力が落ちると、対話を拒否する。これは必然ともいえます。

さらに身体おとろの衰えもまた対話の力をそぐことになります。

老人ホームなどを訪れるとよく分かるのですが、年をとると一般に、表情が乏しくなりがちです。表情の豊かさは、簡単にいうと喜怒哀楽どあいにもなう表情の変化、バリエーションですが、これが若いころより貧弱になっていく。身体能力の変化は顔にも出てくるのです。

同じように声にも衰えが出てきます。声量、音程の幅、持続力、さらに身振り手振りの動きも鈍ってきます。

② こうした身体的な表現能力が低下することで、誤解や勘違いが生じやすくなることは十分に考えられます。なぜなら③ 身体表現の乏しい「むぎだしの」言葉は、さまざまに解釈され、誤解される可能性があるからです。

A あなたが「あんたはバカだ」と、だれかを心配していったとします。その言葉は相手にどのように伝わるでしょうか？ 一般的な語意そのままに受けとられ、相手を怒らせたり傷つけるか。それとも、心配のあまり出た、やさしい思いやりとして相手に伝わるか。

分岐点は、あなたと相手とのそれまでのかかわりかた、そして相手の感受力とともに、あなたの身体的な伝達能力にあると思います。表情や声の調子や仕草といった、言葉ではない身体的なメッセージもまた、スムーズな気持ちの伝達に力を発揮しているのです。

歳をとるとキレやすい。その理由の一端には、身体表現の衰えによって相手にうまく伝わらない、B、相手の身体的なシグナルを感受しにくいということが、あるのかもしれませんが。

ただ最近、面と向かう対話でのこうした\*齟齬が、年齢に関係なく増えているような気がします。ネットを介した言葉のやりとりが多くなり、身体的伝達力とその感受力がおろそかになっていることにも、その一因がある、と私には思えます。ある夜、ジャズのライブで女性シンガーが面白いことをいいました。

彼女には中学生の息子がいます。親子関係は悪くはない。「ふつう」ということです。C その「ふつう」の親子関係でも、最近では息子が母親に平気で、「このタコ」などというそうです。

「早く食べて学校へ行きなさい」

などというとき、きげんが悪いときは、

「うるさいな、タコ」と答える。

それでその母親はこう切り返すそうです。

「ハイ、タコでーすー♪」

シンガーですから、これをメロディにのせて歌うように答える。タコのように手足をくやくにやさせながら。

これに対して息子は、ハーツとため息をつくも素直に食卓につくそうです。

平凡な親子の一風景のようですが、私は彼女のこの受け答えに感心しました。④ これ以上の回答はないような気がするのです。まず、「タコ」といわれた母親が「タコとはなんだ!」とはねつけず、「タコです」と相手の言葉を受け止めたとい

う点。そして、字面にするとうまく伝わらないかもしれませんが、身振りよろしく歌にのせて返したということ。それによって母親自身が「タコ」という侮蔑の言葉を、心理的に体内で溶解させて受け止めることができる。息子は私

ちが感じるほど、この言葉に憎悪をこめているわけではないでしょう。息子は自分の言葉がはねつけられなかったことで、その棘に返り討ちをあびることはなかったと思います。

そんな感想を私はもちました。これは勝手な心理分析ですが、⑤ このやりとりがケータイメールでなされたら、こうはいかないでしょう。

……中略……

対話が身体表現であるということ強く認識させられることがありました。

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」というイベントがあります。闇やみに閉ざされた体育館のような空間を白杖はくじょう一本で歩く。視覚障害者の日常を小一時間体験してみようという催しもよおです。

子供時代にやった目隠しかくの鬼ごっこおにのようなものを想像していたのですが、内容はまったく違いました。牧草地、水辺、トンネル、プラットホームなどが模倣まが的に設置してある空間を、七、八人のグループで肩かたをよせあうように進みます。

白杖一本と先導する人の声がたよりです。一歩足を踏ふみだすのも怖こわくて、なかなかまえに進めません。そのうちに自分がまえに向かっているのか、もしかすると来た道を引き返しているのか、分からなくなります。

そんなとき、スーツと絶妙みょうなタイミングで先導する人の手がどこからともなく伸びてきて「こっちですよ」と声がかかります。その人も条件はおなじ。ただ視覚障害者だから、私たちよりもずっとスムーズに動けるのです。自分もおなじ闇のなかに身を置くと、その感覚は **D** 超能力者ちようのようにさえ感じます。

ともかく手で触れる壁かべ、樹木と違って、人の手や肩が、あれほど温かくホッと安心できるものだとは思いませんでした。初対面の人でも、不慣れな暗闇ではたちまち依存いしあい、声をかけあうようになります。⑥ 気取りや照れはすぐになくなるのです。

暗闇から抜ぬけて、参加したグループで感想を述べあう場がありました。そのなかで先導してくれた人が、面白いことをいいました。

その人は駅で電車を待つときには、かならずだれかの背後に立つといいます。それがもつとも安全だからです。ところが最近、

「気配のない人が増えたから、なかなか人の背後につけない」というのです。

人の背後にならんでいたと思つたら、

「じつは柱だったということも多い」

といいます。

私はそれをきいて、現代人は存在感というものが薄うすれているということだろうか、と思いました。

しかし、どうも違う、と思いなおしました。 **E** 視覚障害者が町中で、人の気配を感じられなくなるというのは、どう

いうことでしょうか？

覇気がない、あるいは気迫がないというようなことでしょうか？ ⑦ 公共の場で息を潜め自己の存在を消している者が多くなつたのか？ 違います。

以前に比べて、駅などの公共の場では、\*傍若無人にふるまう人のほうが増えています。私だけでなく、そう感じている人は多いようです。

昔、若者がヘッドフォンステレオを聴いていて、それから漏れ出る音がほかの乗客にうるさい、と問題になりました。公共心の欠如などと若者批判が出ましたが、それは当時、若者しかヘッドフォンステレオを聴いていなかった、というだけのことでした。

公共心が欠如しているのは若者にかぎりません。最近では中高年男性の車内でのケータイ通話が目立ちます。世代にかぎらず公共の場でエゴをむきだしにする人々が増えています。

ではなぜ、視覚障害者というわずかな気配にも敏感な人が、他者の背中を探すがむずかしくなっているのか。

⑧ 逆説的ですが、それは公共の場でも自己中心的なふるまいにおよぶ人が増えているからです。もしあなたが白杖を持った人と、駅のプラットフォームで遭遇したらどうでしょうか？

声をかけて電車まで導くということまではしなくとも、あなたのそばには人がいるということ、他者が存在するということを、一つの配慮としてそれとなく知らせる、ということくらいはやるはずで、咳払いの一つもするかもしれません。

気配とは察するものですが、同時に発信するものでもあります。言葉として口に出されなくても、非言語的な微妙なやりとりが行われる。だからこそ、白杖を持った人もその背後にならぶことができるといえます。

しかし他者の存在にまったく頓着しない、自己の世界に埋没する存在は、柱のようなものになる。言葉にならないやりとり（非言語的メッセージの発信・受信能力）が、劣化しているためです。

ネットワークは重宝な言葉のメディアです。それを否定することはできません。そのメディアはスピード感のあるやりとりや、不特定多数に情報を発信する能力ではすぐれています。

しかし、身体から発せられる言葉はネットにない豊かさをもっています。ことに人が人と対面し言葉を交わすとき、身振り手振り、声、表情、そして言葉を、もし情報量として換算できたとすると、それはネットワークにはおよびもつかないも

のなるでしょう。

(藤原 智美 『検索バカ』 朝日新書)

〈注〉 齟齬：くいちがいのこと。

傍若無人：まるで周囲に人がいないかのように、好き勝手に行動すること。

問一 文中の A と E に当てはまる語として最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なぜなら      イ そもそも      ウ まるで      エ つまり      オ また      カ しかし      キ もし

問二 —— 線部①「対話する力が落ちる」とありますが、筆者が挙げている「高齢者、お年寄り」の「対話する力が落ちる」原因を二つ答えなさい。

問三 —— 線部②「こうした身体的な表現能力」とは何ですか。三つ答えなさい。

問四 —— 線部③「身体表現の乏しい『むきだしの』言葉は、さまざまに解釈され、誤解される可能性がある」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問五 —— 線部④「これ以上の回答はないような気がする」とありますが、この母親の受け答えがどうして「これ以上の回答はない」ものなのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 息子の言葉にこめられた憎悪の気持ちを理解し、母親がおどけて見せることで息子の機嫌を取っているから。

イ 母親自身が侮蔑の言葉を受け止めることができる一方、息子は自分の言葉の悪意を返されることが無いから。

ウ 母親がとっさにシンガーとしての能力を発揮した一方で、息子も自分のいらだちを受け止めてもらえたから。

エ 思春期の息子のとる反抗的な態度には、母親はいちいち目くじらを立てず見過ごしてやるのがいい方法だから。

オ 母親自身が息子の侮蔑の言葉に深く傷つくことなく、息子に対してかえって楽しく返事を返しているから。

問六 —— 線部⑤「このやりとりがケータイメールでなされたら、こうはいかない」とありますが、それはなぜですか。「この母子のやりとりが」に続くように、説明しなさい。

問七——線部⑥「気取りや照れはすぐになくなる」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問八——線部⑦「公共の場で息を潜め自己の存在を消している者が多くなったのか？ 違います」とありますが、筆者はなぜ「違う」と考えているのですか。説明しなさい。

問九——線部⑧「逆説的」とは、ここでは「一見すると、普通に考えるのとは逆のように思える」というような意味ですが、どういうところが「逆説的」なのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 普通、自己中心の人の方が存在感が強いと思われがちなのに、現実にはそういう人の方が発する気配が小さいものだというところ。

イ 本当はみんなが周囲に気を配るようになるべきなのに、実際には自己中心的に、身勝手にふるまう人の方が増えてきているところ。

ウ 強い存在感を持つ自己中心の人の方が目立ちそうなものなのに、みんなが強い気配を発するせいでかえって視覚障害者が一人一人の存在を意識できなくなっているところ。

エ 自己中心の人の方が存在感を強く感じさせて目立ちそうなものなのに、かえって視覚障害者が背中を探すことに困難を感じているところ。

オ これまでは公共の場では自己中心的なふるまいをしてはいけなかったのに、公共の場にもそういう人が増えてしまっているところ。

問十 本文の主張として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 電子ネットワークは便利な言葉のメディアではあるが、その普及きゆうによって人々の身体表現は衰えてしまった。今こそ電子ネットワークを否定し、身体表現を取り戻もどさなければならない。

イ 近年、対話での食い違いが増えてきているが、それは身体表現とそれを受け止める力が弱まっているからである。それらを見直すことこそが対話を豊かなものにするだろう。

ウ 歳をとると身体表現が衰え、対話する能力が落ちていくものだが、近年は若者も身体能力が衰えている。電子ネットワークのような文字情報の交換しかできなくなっているのはそのためである。

エ 高齢者や若者は、身体的伝達力とその感受性がおろそかになっている。彼らかれを安心させ、豊かな対話を成立させるためには身体的に受け止めてやる必要がある。

オ 近年では、自己の世界に埋没し、公共の場でエゴをむきだしにする人々が増えている。その一因は身体表現の衰えであり、身体表現を取り戻すことで、豊かな公共心を育てる必要がある。



問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

時夫は、マンシヨンの駐<sup>ちゆう</sup>車場にとめてある赤い車のかげにしゃがみこんで、じつと息をつめていた。うすぐらい駐<sup>ちゆう</sup>車場にたかたかと足音がひびき、心臓が、いたいほどドキドキする。

「ゆたかみーつけっ。真理子みーつけっ」

ひろしがさけび、みんないっせいに走りだした。駐<sup>ちゆう</sup>車場をとびだすと空気がうす青く、もう夕方がはじまっている。わーっという歓<sup>かん</sup>声<sup>こゑ</sup>があがり、ひろしがカンをけって、今度はゆたかが鬼<sup>おに</sup>になる。

カポーン。あちこちへこんだあきカンが、まのぬけた音をたててもう一度けられ、鬼<sup>おに</sup>をのこしてみんなかけだした。時夫は、丁字路まで走って思い出したように立ちどまり、くるっとうしろをふりむいた。

「やっぱり」

やっぱり、だった。青屋根のたてものの窓から、<sup>①</sup>きょうもおばあさんが見ている。青屋根のたてものは、そこからへい一つへだてたキャベツ畑のむこうにあった。

「<sup>②</sup>オレ、ぬける」

ぽつんと言って、時夫はへいによしのぼると、ひよいととびおりた。ほこつと土のおいがする。

「おい。どこ行くんだ。養老院だぞ」

背中ごしにゆたかの声がした。その青屋根には、ボケてしまった老人がたくさんいるので、子供たちはこわがってちかよらないのだ。若い女の人の血をすって生きているおばあさんがいるとか、子供の肉でつくったハンバーグが好物のおじいさんがいるとか、いろんなうわさがあった。

この養老院では週に一度、老人たちに看護婦さんが何人かつきそって、散歩に行くことになっていた。時夫とおばあさんが出会ったのも、そんな散歩の時だった。もう一カ月ほど前になるだろうか。川ぞいの道でお父さんとキャッチボールをしている時夫を、おばあさんは土手からながめていた。

「行くぞ、時夫」

お父さんがそう言った時、<sup>①</sup>やおら立ち上がったおばあさんはとつぜん、大きな声でこう言ったのだ。

「あんだ、トキオ、いうんか。わたしはトキ、いうんじゃよ」

びっくりするほどしつかりした足どりで、つかつかとちかづいてきたおばあさんは背がひくく、日にやけて、やせていた。「友達に、なつてくれるかの」

おばあさんは破顔一笑、そう言った。

それから毎日、おばあさんは窓から時夫を見つめていたのだ。あそびに来てほしいのかもしれない、時夫は何度もそう思ったが、その勇氣はなかった。キャベツ畑のむこうの青屋根といえ、子供たちにとって、おばけ屋敷もおんなじだったのだ。

けれども、もう決心した。時夫はぐつと胸をはり、キャベツ畑のまん中の細い小道を、どんどん歩いていく。

「もどつてこいよ。鬼ばあがいるぞ」

「ハンバーグにされちゃうから」

みんなの声が、うしろからきこえていた。

小さな玄関を入り、病院のような待ち合い室をぬけると階段があり、窓を目印にいくと、おばあさんの部屋はすぐにわかった。色あせた畳の上に冷蔵庫とテレビがおいてある。時夫は帽子をとつておじぎをした。

「待つとつたよ。これはルームメイトのゆりこさんに、げんさんに、ひさしさん。これは私の友達のトキオ」

おばあさんはじゅんぐりに紹介し、冷蔵庫からジュースをだしてくれた。おばあさんが「ルームメイト」という言葉を使ったのがなんとなくおかしくて、時夫は心の中でくすつと笑い、<sup>③</sup>緊張が、するつとほどけた。

「毎日毎日、カンけりしとつたなあ」

おばあさんが言つて、

「トキさんはまた、それを毎日毎日、見とつたなあ」

ひさしさんが言つた。ひさしさんは白髪頭を短く刈つた、色白のおじいさんだ。

「見ていると、私もいっしょに遊んでいるような気がしおつてね」

おばあさんははずかしそうに笑うのだった。

ゆりこさんと呼ばれたおばあさんは長い髪を左がわでおさげに編んで、白い浴衣を着ていた。部屋のすみの赤い座布団の上ですわって、一心にお手玉をしている。時夫の視線に気がつく、しずかに、ふわつと笑った。小さな、白い、**㉞** あどけない顔だった。

「アイスクリームがあるからおあがり。あんたのために買うといたに」

おばあさんが言った。**㉟** 紙のカップに入ったバナアイスはかちかちにかたまつて、冷蔵庫のにおいがついていて。ずいぶん前から買ってあったんだな。時夫はそう思いながら、さっきから窓のそばでたばこをすっている、げんさんというおじいさんの横顔をちらりと見た。むつつりして、少しこわい横顔だった。

「テレビ、みようか。そろそろ大乃国<sup>おののくに</sup>がでるころだな」

ひさしさんが言った。

「大乃国？ だめだめ、すもうは舛田山<sup>ますだやま</sup>だよ」

「おっ、しぶ好みだな」

おすもう好きのひさしさんと、やつぱりおすもう好きの時夫とはすっかり意気投合し、ハンバーグだなんてうそばつかり、と、時夫は心の中でつぶやいた。

**㊱** その日以来毎日、学校から帰ると時夫は養老院に遊びにいった。おばあさんがどつきり持っているおはじきや昔のお金、古い写真や思い出話は、冷蔵庫でひえているアイスクリームやバナナよりもっと魅力的だった。

ある日、おばあさんが時夫を散歩にさそった。

「ホームの庭は、きょうちくとうがさかりだからね」

ほんとうに、ぼつてりと紅<sup>あか</sup>いきょうちくとうの花が、夏の日ざしの中で眠<sup>ねむ</sup>たそうに咲<sup>さ</sup>いていた。セミがうるさく鳴いている。

「たまには気をきかせなくちゃね」

時夫がきょんとんとしていると、おばあさんはいかにも重大な秘密のように、

「ゆりこさんとげんさんよ」

と言った。時夫はまじめな顔で、

「へえ」

とこたえたが、なんだかふしぎな感じだった。おじいさんとおばあさんでも恋こいをしたりするなんて、時夫には思ってもないことだったのだ。

……中略……

夏休みも半分がすぎたころ、時夫がいつものようにおばあさんの部屋にあそびにいくと、階段の上にはげんさんが立っていた。白いランニングシャツから、やけた腕うでをこつこつとだして、やっぱりたばこをすっている。

⑥「もう、トキさんのところに行くのはやめた方がいい」

時夫は腹が立った。お父さんならまだしも、げんさんにそんなことを言われるすじあいはない。

「どいて下さい」

まっすぐおばあさんの部屋に歩いていく時夫のうしろ姿を、げんさんは階段の上に立ったままみつめていた。ドアをあけると、おばあさんは窓のそばにすわっていて、時夫をみても知らん顔だった。

「こんにちは」

時夫があいさつすると、おばあさんはふかぶかと頭をさげた。

「おとといから、急にボケちゃったんですよ」

ひさしさんがあっさりと言い、おばあさんはぼんやりと、窓の外をみていた。時夫が半信半疑のまま立っていると、とつぜん、おばあさんがかん高くさげんだ。

「トキオツ。トキオじゃないか」

おどろいている時夫にしがみついたおばあさんは、ものすごいぎょうそうで髪かみをふり乱していた。

「やっとうみつけたよ、トキオ。もうにがすもんか。ここから出しとくれよお、トキオ。死んでもいっしょだよね。友達もんね」

ほそくてしわだらけの腕の、いったいどこにこんな力があつたのか、げんさんが入ってきておばあさんをおさえてくれたあとも、時夫はしばらく動けなかった。背中がつめたくて、ひざに力が入らないのだ。部屋の奥おくでは、ゆりこさんがお手玉をしていた。ひさしさんはおすもうをみている。

やっぱり鬼ばばあだ。みんな鬼ばばあと鬼じじいだ。

「ちきしょう」

時夫は、そうさけぶが早いか駆けだしていた。こわくて、くやしくて、涙がとまらないのだ。目のすみで、きょうちくとうの花がゆれていた。

それから、時夫はカンけりの日々にもどり、青屋根のできごとは、誰にきかれても口をきつくむすんだまま、こたえようとしなかった。そのうちに、みんな青屋根のことは何も言わなくなった。学校に行き、学校から帰り、晩ごはんまで表であそぶ、いつもの生活がもどってきたのだ。いつのまにか、秋がきていた。

「時夫みーつけっ」

ゆたかの声がして、時夫は、誰かがゆたかより先にカンをけつてくれることをねがいながら、マンションの植えこみからごそごそとはいだした。次の瞬間、時夫はびくんとからだをかたくした。前から、おじいさんが二人とおばあさんが二人、二人の看護婦さんにつきそわれて歩いてくるのだ。週に一度の散歩の日だつ。時夫は、心臓がとびだしそうにドキドキし、ゆびさががぞわつとつめたくなつた。かくれたいのに動けない。おじいさんは、げんさんとひさしさんだつた。おばあさんは、ゆりこさんともう一人、知らないおばあさんだつた。

「やあ、トキオくん。ひさしぶりだね」

ひさしさんが、片手をあげて言う。

「……はい」

時夫がやつとの思いで返事をする、ひさしさんはにっこり笑つて、  
「こちらはヤエさん。青森出身なので、出羽の花がひいきなんです」

と、うれしそうに言った。そのおばあさんは大がらで、ざんぎり頭だつた。黙りこんでいる時夫の疑問にこたえるように、げんさんが言った。

「トキさんは、ちがう部屋にうつつた」

時夫はほつとした。何だ、死んだわけじゃないんだ。そんな時夫の気持ちをみすかしたように、げんさんはにやつと笑つて、ごつごつした手をゆりこさんの背中にまわし、ゆりこさんをかばうようにして行ってしまった。ゆりこさんは、長い髪

をあいかわらずおさげに編んで、小さな、しわくちやの紙袋紙袋を持つている。知ってる。あの中にはお手玉が入ってるんだ。あの人はあれを、かたときもはなさない。時夫は、老人たちのうしろ姿を見送りながら、夏の日、きょうちくとうの咲く庭で、

「ゆりこさんとげんさんよ」

と言ったおばあさんの、いたずらつぽい顔を思い出していた。

T字路から、ひろしが走ってきた。

「時夫、何ぼーっとしてんだよ。おまえが鬼だぜ」

「あ。うん」

もうすっかり日が暮れて、家々の窓から晩ごはんのにおいがしている。

「あ。うちハンバーグ。私いつちぬけたあ」

真理子がぱつきびすをかえして走っていった。

「オレも、もう帰るよ」

時夫がそう言うと、

「何だよ、オニ、ヤメかよ」

ひろしが不服そうに口をとがらせた。時夫はあいまいにごまかし笑いをして、ひろしとゆたかに手をふった。

その日はずつと、あの老人たちの姿が時夫の頭からはなれなかった。新しいルームメイトと楽しそうにしゃべっていたひさしさんを思い出すと、<sup>⑦</sup>時夫はひどくいやな気持ちになるのだった。あんなにあっけらかんとしちゃってさ。それに、時

夫は、げんさんとゆりこさんがよりそって歩いていたのも気に入らなかつた。なぜだか、おばあさんがかわいそうな気がしたのだ。僕ぼくには関係ない。いくらそう思ってみても、気持ちはちつとも晴れなかつた。

次の日も、その次の日も、時夫の頭のすみに、おばあさんのことはひつかかかったままだった。ボケると、部屋をうつされちゃうんだろうか。今度も、ルームメイトがいるんだろうか。ボケたら一人部屋になるのかもしれない。あばれるから、ろうやみたいな部屋かもしれない。時夫の胸にろうやの中にぼつんと一人ですわっているおばあさんの姿が、うかんできた。ぞつとして、頭をふり、<sup>⑧</sup>いやな考えをおいだそうとした。

「いくぞーっ」

でこぼこのカンをめがけてゆたかが走ってくる。あ、オレ、鬼だったっけ。ゆたかがカンをけり、時夫はそれをひろうと目をつぶって十かぞえた。みんながかくれにいく足音がする。

「……七、八、九、十っ」

ぱつと目をあげると、秋の日がさしたキャベツ畑がへいごしに見え、その向うの青屋根の、はじっここの窓におばあさんの顔がのぞいていた。おばあさんの目は、ぼおっと、無表情に、時夫をみつめている。

「オレ、ぬけるっ。ごめんっ」

かくれているみんなに聞こえるように思いきり大きな声でそう言うと、時夫はへいをよじのぼった。

……中略……

学校から帰ると、時夫はまた毎日、おばあさんのところに遊びに行くようになった。けれどもいつも、ほんの十五分だった。十五分するとおばあさんは疲れて、ことんと眠ってしまうのだ。それで時夫は、おばあさんのところに行つたあと、みんなと、好きなだけカンけりができた。カンけりをしながらふつと青屋根をみると、昼寝からさめたおばあさんの顔が、窓からのぞいていたりした。おばあさんは時夫をながめていることもあつたが、もつとずっと遠くをながめていることもあつた。

時夫が遊びにいくと、おばあさんは時夫を覚えていることもあつたし、覚えていないこともあつた。覚えていない日はもう一度、

「わたしはトキ、いうんよ。あんたは？」

からやりなおさなくてはならなかった。十二月の、最初の月曜日がそうだった。おばあさんは時夫にみかんをむいてくれながら、

「おんなじ名前だな」

と言って笑った。十五分たつても、おばあさんはその日眠らなかつた。目をぱちぱちさせながら、笑ったりしゃべったりしている。三十分たつても眠らない。昔のことをうれしそうにしゃべるだけでなく、時夫のことや学校のこと、しきりにききたがった。時夫が、ゆたかやひろしのことを話すと、おばあさんは夢みるような口調で、

「会ってみたいなあ」

と言った。それでつい、

「今度つれてくるよ」

と言ってしまった時夫は、言ったあとで後悔かいした。それでも、興奮した調子で、

「ほんとか」

とたたみかけてくるおばあさんの顔をみれば、

「うん」

とこたえるほかなかった。

「それじゃ、僕……」

時夫が言いかけると、おばあさんはさびしそうな顔をした。子どものような顔だった。

「もう、帰るんか」

「うん、また来る」

おばあさんは心細そうに笑って、待つとるよ、と言った。

冬休みはあつという間にやってきた。クリスマスがきて、お正月がきて、時夫は家族旅行に行った。そうして、一月もなかばになってようやく、一カ月ぶりにおばあさんの部屋をたずねると、おばあさんはもういなかった。

「ちつとも苦しまれませんでしたよ」

看護婦さんが言い、時夫は頭がぐらぐらした。

待つとるよ、

と言ったおばあさんの顔が目にかんで、呼吸がはやくなる。

階段をかけおいて、庭をぬけ、目のはじをかすめたのは冬枯がれたきようちくとうだった。つめたい風がふいていた。待つとるって言ったくせに。待つとるって言ったくせに。時夫はへいをとびこえて、マンションまでいっきに走ると、<sup>⑨</sup>駐車場の車のかげにしゃがみこんで泣いた。



問一 〓 線部 a 「やおら」・ b 「あどけない」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「やおら」

ア もたもたと  
イ あわただしく  
ウ 悲しそうに  
エ 思い出したように  
オ ゆっくりと

② 「あどけない」

ア 優しく感じがよい  
イ 幼くかわいらしい  
ウ やんちゃで快活かいかつそうなの  
エ まるくてふつくらした  
オ 清らかで明るい

問二 〓 線部 ① 「きょうもおばあさんが見ている」とありますが、この時おばあさんはどのようなことを思っ  
てこちらを見ていると、時夫は考えていますか。答えなさい。

問三 〓 線部 ② 「オレ、ぬける」とありますが、時夫は、何をするためにどこへ行こうとしているのですか。次の文の

1 2 に合うように答えなさい。

時夫は、  
1 ために、  
2 へ行こうとしている。

問四 〓 線部 ③ 「緊張が、するっとほどけた」とありますが、時夫はこの時までなぜ緊張していたのですか。答えなさい。

問五 〓 線部 ④ 「紙のカップに入ったバナナアイスはかちかちにかたまつて、冷蔵庫のにおいがついていた」とありますが、このアイスの様子から、おばあさんのどのような気持ちかわかりますか。答えなさい。

問六 〓 線部 ⑤ 「その日以来毎日、学校から帰ると時夫は養老院に遊びにいった」とありますが、時夫が毎日養老院に遊びにいったのはなぜですか。説明しなさい。

問七——線部⑥「もう、トキさんのところに行くのはやめた方がいい」とありますが、「げんさん」が時夫にこのように言

ったのはなぜですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 毎日遊びに来る時夫にいい加減うんざりしており、もう来させたくないと思ったから。

イ せっかくの夏休みなのに老人の相手ばかりしている時夫を、かわいそうだと思ったから。

ウ ボケてしまったトキの様子に、時夫が大きなショックを受けるに違ちがいがないと思ったから。

エ 子供に怖こわがられている養老院に入りにいると、時夫に友人がいなくなってしまうと思ったから。

オ トキはボケて時夫を忘れていたので、時夫が行くとトキが混乱するだろうと思ったから。

問八——線部⑦「時夫はひどくいやな気持ちになるのだった」とありますが、それはなぜですか。その理由として、最も適

当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア トキのことを仲間はずれにして楽しんでるひさしの態度が許せなかったから。

イ まるでトキのことなど忘れたかのようにふるまうひさしの態度がおもしろくなかったから。

ウ 時夫の気持ちも考えずに笑顔で新しいおばあさんを紹介するひさしが不気味だったから。

エ ボケたトキには何をしても良いと思ってるひさしはボケてしまったのだけだと思ったから。

オ ルームメイトのトキを忘れてるひさしはボケてしまったのだと思ったから。

問九——線部⑧「いやな考え」とありますが、時夫はどのようなことを考えたのですか。答えなさい。

問十 ——線部⑨「駐車場の車のかげにしゃがみこんで泣いた」とありますが、この時の時夫の心情はどのようなものですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 心を通わせることができたおばあさんとの楽しい日々を思い出し、生きている間に話ができなかったことをとても後悔している。

イ 自分がゆたかやひろしを連れていくまではどうしても生きていてほしかったのに、その前に死んでしまったおばあさんを憎いと思い、恨んでいる。

ウ 待つていると言っていたおばあさんが時夫と再会する前に死んでしまったことに大きな衝撃を受け、その死を心から惜しんでいる。

エ おばあさんにはもつと生きていてほしかったのに、一カ月ぶりに部屋を訪ねた時には亡くなってしまっていたことを、残念に思い悲しんでいる。

オ ボケてしまつてからは時夫と顔を合わせることもなく、仲の良いルームメイトとも離れて孤独な死を迎えたであろうおばあさんのことを、かわいそうだと思つている。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 彼はホガらかな人柄で、皆に慕われていた。
- ② 隣の家へのエンシヨウを防ぐため、消火剤をまいた。
- ③ 企業の不正をアバク記事を書く。
- ④ 小さな祠にも神様がマツられていてる。
- ⑤ 横綱がドヒヨウ入りを行う。
- ⑥ 待ち合わせに遅れそうで、気が急いでいた。
- ⑦ 人の道に外れていてると彼を非難した。
- ⑧ 地震に対して、万全の対策をとっている。
- ⑨ もう夜も遅いから、潮時を見て引き揚げよう。
- ⑩ あなたの理想に合う品はこの店にはない。

問題四

次の①～⑩それぞれの文の（ ）に入れるのに最も適当なひらがな一文字を答えなさい。

- ① あきらめ（ ）つく
- ② 敬意（ ）はらう
- ③ 念頭（ ）置く
- ④ けじめ（ ）つける
- ⑤ 大台（ ）乗る
- ⑥ 手間（ ）かける
- ⑦ 大目玉（ ）食う
- ⑧ 思案（ ）暮れる
- ⑨ 合点（ ）いく
- ⑩ あとかた（ ）ない

問題五

次の会話は、トモコさんが親戚のおばさんの家を訪ねた際のもので、——線部①～⑤の表現・表記には不適当な部分があります。例にならって、——線部全体をそれぞれ適切に直しなさい。

トモコさん 「例 こんにちわ。」 ↓ (解答) 「こんにちは。」

おばさん 「あら、お久しぶり。しばらく顔を見せなかったから、① 気の置ける親友との遊びで忙しいのかと思っていましたよ。」

トモコさん 「いいえ。別のことでちよつと忙しくて。」

おばさん 「何かあったの？」

トモコさん 「合唱コンクールで伴奏者ばんそうに選ばれたのですが、曲が難しくて、私の② 役不足でなかなか上手く弾ひけるようにならなくて。週末毎に練習に明け暮れていて、家から③ 出れなかったのです。」

おばさん 「伴奏者ばんそうに選ばれるなんて、すごいわね。」

トモコさん 「伴奏者ばんそうに選ばれたと言っても、おばさんが思っているのはきつと④ 違くた。何で選ばれたのかと自分でも⑤ 頭をかき上げていたら、実はピアノを弾ける子がクラスに私しかないなかつたのです。」

おばさん 「それは大変でしたね。」

(以下余白)